

平成29年度 京都府立南陽高等学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

学校経営方針（中期経営目標）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
<p>校是の「進取」「敬愛」「雄健」の具現化を図り、地域から信頼される質の高い教育を実践し、未来の創り手を育成する。そのために、</p> <p>① 自ら学ぶ姿勢を有し、自ら高みに挑戦する生徒を育て、学力の伸長を図る。</p> <p>② 特別活動等により、知・徳・体のバランスのとれた生徒の育成を図る。</p> <p>③ 生徒、教職員、保護者が一体となって、教育内容の質の向上を図る。</p> <p>④ 学研都市の資源を活用しながら、社会の一員としての自覚を持った生徒を育成し、文化学術研究を実践する学校づくりを進める。</p>	<p>◇ 生徒一人ひとりが目的意識を持って進路実現を果たした。今後は主体的・自立的に学習し挑戦する生徒の育成に向け、さらに教育力の向上を図る必要がある。</p> <p>◇ 文化祭の内容充実をはじめ、中・短期の海外留学や国際交流、ボランティア活動等、生徒の主体的な活動が広がった。</p> <p>◇ 生徒・保護者アンケートに基づき、生徒個人ロッカーの設置やトイレのメンテナンス等の学校改善に取り組むことができた。</p> <p>◇ 日常的な校務の増加や複雑化・困難化が進み、生徒と向き合う時間の確保が課題となっている。学習指導や進学指導等に集中できるための業務の適正化や生産性の向上が必要である。</p>	<p>① 個に応じた学習内容の提供及び思考力・判断力・表現力を育成するための指導方法の工夫改善等、学習指導の充実のための研究・実践を行う。</p> <p>② 難関大学進学に向けた組織体制を確立し、効果的な学習・進路指導を展開する。</p> <p>③ 4つの奨励（部活動、国際交流、ボランティア、コンテスト）を継続し、生徒の主体的・協働的な活動の機会を増やす。</p> <p>④ 中高一貫教育校の開校に向けた具体的な検討を行い、関係機関と連携しつつ計画的に準備を進める。</p> <p>⑤ 情報発信を積極的に行うとともに、生徒・保護者アンケートや学校関係者評価を活用し、学習者起点による学校の魅力化を図る。</p> <p>⑥ ダイバーシティとワークライフバランスに係る具体的な取組を進める。</p>

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		総合評価時:改善策(成果と課題)
			総合評価		
			各項	総合	
教務部	学習指導の充実を図る。	個に応じた指導につなげる課題の内容及び提供方法について、教科会議及び教科主任会議で研究する。	B	B	個に応じた指導につなげる課題等については、教科会議で議論し、その内容を教科主任会議で共有できた。また、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながる授業をテーマとして、外部講師によらない教職員研修会を実施した。今後は、高大接続改革や新学習指導要領、中高一貫教育を見据えて、教育課程の検討・改善を推進し、学習指導の充実につなげていく。
		高大接続改革の動向を見据えた「主体的・対話的で深い学び」の実現につながる授業について、その指導方法の工夫改善のための研究や実践を行う。	A		
		中高一貫教育校開校及び学習指導要領改訂を踏まえた教育課程の検討・改善を行う。	B		
生徒指導部	薬物乱用の根絶	2、3年生を対象に薬物乱用防止講演会を実施する。	A	A	生徒対象の講演会および教職員研修において、例年とは視点を変えて講師選出を行った。アンケート結果は好評であった。
		教職員対象の研修会を実施する。	A		
		木津警察署と月1回以上の情報交換(薬物乱用を含む)を行う。	A		
	主体的な活動の充実	部局勧誘立て看板を効率的に設置するとともに、ダブルアップセミナーにおいても各部を紹介する。また、中庭パフォーマンスを盛り上げるよう放送局との連携強化を図る。	B	B	部活動加入にあつては、初期段階が重要であるため、積極的な広報活動を工夫する必要がある。各種講演会等は、「・・・またか」といった反応にならないよう実施回数や内容の工夫が必要である。生徒会の育成には成果を感じる。
		様々な取り組みや研修会(講習会)においては、実施の背景を明確にし、肯定的かつ積極的に取り組めるよう工夫する。	B		
		生徒会を通じた行事において生徒が主体的に取り組めるよう、生徒の熱意に寄り添いながら丁寧な手順を踏まえ、計画的な指導を行う。	A		
	人権教育の充実	各種奨学金等の案内・手続きを行う。	A	A	行事を通して学ぶことは多いが、「日常」の中で人権意識の高揚につながるような、教員一人ひとりにじみ出る人権感覚が求められる。他分掌の各種行事との連続性を避ける必要がある。
		人権学習前に人権ニュースを発行し、導入に役立てる。	A		
		1、3学年で共通アンケートを実施する。	A		
進路指導部	個に応じた学習指導の充実を図る。	土曜学習会や長期休業中の進学講習の内容を教科・学年と調整し、学習内容別の講座選択を実施する等個々の生徒のニーズに対応した、より効果的な学習指導を実践する。	B	B	講習の内容について検討を重ね、生徒のニーズに対応した実施形態に変更した。夏期講習の課題を踏まえ冬期講習および二次対策講習を実施した。進路情報通信により必要な情報を適切な時期に発信した。
		進路情報通信の発行を定期的に行い、生徒の学習意欲の向上と維持に努め、タイムリーな情報を生徒・保護者に発信することで個々の生徒が抱える課題の発見とその解決の契機とする。	A		
	難関大学進学に向けた学習指導・進路指導の研究・実践を行う。	難関大学進学に向けた学習集団(チーム・ガリレオ)を育成し、ICTを利用した学習について研究を深め、生徒の実態に応じた学習指導についての手法を柔軟に実践する。	B	B	難関大学志望者に対して、ガリレオを中心にICTを活用する等、新たな対策に取り組んだ。進路検討会を通じ3年担任団と協働して出願指導の体制を整えた。
		進路検討会とおして3年学年団と連携をさらに深め、学習指導・進路指導の協働体制を強化する。	B		
	各種模擬試験データの共有と分析を行う。	進学情報会議で情報を共有化するとともに、各教科・学年での進路指導方針を立案し、日常の学習指導や生徒面談に反映させる。	A	B	模擬試験の分析を行い学年団と現状を共有し、指導方針について協議できた。Fine やCompass 等の活用を推進し、教科や学年での指導に活かした。
		FINEシステムやデジタルサービスの活用により、学級担任・教科担当者レベルでの分析を充実させ教員集団としての情報分析力を高める。	B		

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		総合評価時:改善策(成果と課題)		
			総合評価				
			各項目	総合			
保健部	多様化する健康課題への対応	学年に応じた健康教育を実施するとともに、救命救急意識の高揚を図るため保健委員・部局員代表者に対して救急処置研修会を実施する。	A	A	各学年毎に健康教育を実施するとともに、教職員に対しても、スクールカウンセラーから事例を通して学ぶ研修会を実施した。最新の健康に関する情報を提供するため、保健室だよりを発行し、保健室前の掲示物を管理・工夫して、情報提供に努めた。		
		教職員のスキルアップのため教職員研修会を実施するとともに、救命救急処置のレベルアップ及び意識の高揚を図るため普通救命講習を実施する。	A				
		最新の健康に関する情報を提供し、生徒自身の行動変容を促すため保健室だよりを10回発行する。	A				
	他分掌や関係機関等との連携	健康課題の早期発見・早期対応を図るため、健康観察・情報交換を毎日実施する。	A	A		日々の健康観察や教職員間の連携によって、感染症の流行や欠席状況を早い段階で把握し、対応に努めた。担任やスクールカウンセラー等と連携するとともに、学校適応指導会議を通じて、教職員の共通理解を深めた。事故を未然に防ぐため、啓発等を工夫していきたい。	
		学校適応指導会議を実施し、共通認識を持って支援を継続する。	A				
		事故災害の状況把握に努めるとともに、事故を未然に防ぐ取組を推し進める。	B				
生徒の主体的な活動の充実	自らの健康に対する意識の向上を図るため、保健委員会だよりを10回発行する。	A	A	長期休業中の校内清掃や、日常の水質検査など、学校の美化や保健衛生を高めるため活動した。たよりに関しても、季節毎、行事毎に起こりうる病気やけがについて、その予防方法を含めタイムリーに発行できた。			
	生徒及び教職員の美化意識の向上を図るとともに学習環境を整えるため、美化委員会だよりを10回発行する。	B					
図書部	図書委員会の活動内容を整理し、より主体的な活動につなげる。	「広報」班を新しく設け、図書館や委員会活動についての情報発信のための図書委員会だより「F・I・B」を学期に1回発行する。	A		A		「広報班」による図書委員会だよりで情報発信を定期的に行うことができた。国立国会図書館関西館の職員の方を招いて座談会を実施し、その後の見学会につないだ。保育所と連携し、絵本の修理や訪問という形でのボランティアに取り組んだ。今後もこのような外部とのつながりを活かしながら、より主体的な活動を模索したい。
		国立国会図書館関西館や地域の保育所など外部との連携による企画実施を通じて、図書館や読書についての見方を広げる。	A				
	授業等での図書館利用と関連図書の貸し出しを増加させる。	中学生向けの書籍と、新書など小論文に関する書籍を増やす。	A		B	小論文頻出テーマを調査して新書を充実させた。中学生向けの書籍を準備し、効果的な本の配置を工夫して、図書館利用と関連図書の貸し出しが増加した。教職員向け図書館だよりの発行は順調に行えたが、教科の需要をもっと掘り起こし、書籍をより充実させたい。	
		おおむね学期に2回、教職員向けの図書館だよりを発行するとともに、各教科の需要を調査して、教科に関連する書籍とその展示を充実させる。	B				
	生徒の知的好奇心に働きかける企画展示を工夫する。	「ワンボックス」を、教職員に協力依頼することも含めてより多様なテーマで作成し、また定期的に更新する。	A	B	図書委員・図書部による「ワンボックス」は定着したが、展示の仕方、他の教職員への作成依頼などでまだ工夫の余地がある。また、館内の他のスペースを有効に利用した企画展示もさらに工夫したい。		

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		総合評価時:改善策(成果と課題)			
			総合評価					
			各 項	総合				
企画研究部	生徒の主体的・協働的な活動の機会を増やす。	留学経験生徒を活用し、生徒が主体的に企画・運営する国際交流事業を実施する。	A	B	海外への留学希望者・経験者が増加してきた。また、留学生を受入れた校内での国際交流の取組も定着してきた。オープンキャンパスなど学校公開における主体的な生徒の活動は参加者からも好評である。			
		学研都市など地元の企業・団体等と連携して、生徒が自ら課題の発見・解決に取り組むプロジェクトを推進する。	B					
	学校情報を積極的に発信する。	活力のある生徒の表情や活躍を全教職員体制でHPに情報発信する。	A	B		学校行事・部局の活動などの学校情報の発信がそれぞれの担当部署より、積極的にHPにアップされるようになった。活躍している生徒が成果を発表できる場の企画を分掌横断的にすすめていきたい。		
		活躍している生徒自身が成果を発表できる場を企画する。	B					
事務部	中高一貫教育校の開校に向けた円滑な校内運営を図る。	大規模工事が予定されている中、調整・協議を踏まえ、教育効果を落とさないように図る。	A	A	大規模改修工事を限られた時間の中で、安全を第一とし、現教育効果も落とすことをひかえ、長年の課題であった生徒用トイレの全面改修(洋式化)を行った。中高一貫教育校の開校に向けては、各教科との調整を進め、物品購入・整備を行った。			
		既存の工事だけでなく、付帯する箇所においても着手へと展開させるよう働きかける。また、校内運営費と掛け合わせ、誇りに思える教育環境作りを構築させる。	A					
		奨学金等の説明会を開催し、丁寧な対応をもって奨学援助を助成する。	A					
	就学の保障を充実させる。	府子ども貧困対策推進計画に則り、支援の充実に向け生徒把握・援助対応等を図る。生徒指導部人権係と連携を深め各種奨学金の活用を努める。	B	B		奨学金等について、適切な時期に案内が出来、奨学援助を助成することが出来た。		
		技術職員を中心に点検日を設置し、教職員並びに生徒の安心・安全に努める。	A	A		日頃から安心、安全を心がけ点検を実施し、修繕箇所においては早期着手するなど事故防止の取り組みが出来た。		
	校内の安全・安心・美化に努める。	危険箇所においては、早急に改修する。	B					
		年間修繕・改善一覧表を作成し、傾向を探り、次年度へ繋げる。	A					
		第1学年部	自立した人として、規律を重んじ、他者を思いやる心を養う。	集合指導等を通して集団生活の中で規律を守ることの大切さを意識させる。また、挨拶の励行、他者への思いやり等を担任が折に触れて説く。			B	B
	主体的に学習に取り組み、より高い目標に向かって学び続ける学習習慣を身につけさせる。		LHR等で模試の活用の仕方を説明し、生徒が模擬テストで学ぶ習慣を身につけられるよう指導する。	A			A	模擬試験の意義や活用方法を折りに触れて説明すると共に、個々の結果を丁寧に分析して生徒に返すことで、主体的に模擬試験を受験し、学びに役立てる習慣を身につけさせることができた。また、家庭との連携を密にすると共に、面談等を活用して個々の生徒の実態把握、課題解決に努めた。
個々の生徒が抱える様々な問題を早期に発見するために、学期に1回以上の面談を行う。			A					
広い視野を持ち、進路について考えさせる	進路指導部と連携し、大学の授業を体験できる機会を設定する。	B	B	プロフェッサービジットを活用した。関係分掌とのよりきめ細かな連携や、事前・事後指導の充実が今後の課題である。				

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		総合評価時:改善策(成果と課題)
			総合評価		
			各項目	総合	
第2学年部	進路目標の決定と主体的な行動	大学調べ、卒業生との交流、オープンキャンパスへの参加など、進路希望の選択肢を広げるための主体的な行動を促す。	B	B	大学調べや志望理由書の作成を通して、進路希望について主体的に調べ、考えることができた。今後はスケジュール管理などしっかりできるように指導していく。
		未来手帳を活用し、自己管理する力を身につけさせる。	B		
		土曜学習、講習や各教科からの自主課題を通して、ワンランク上の課題に積極的にチャレンジする姿勢を身につけさせる。	B		
	授業を大切にする姿勢	予習、授業、復習のサイクルを定着させるため学習記録を定期的に点検する。	B	B	教科担当と連携をとり、生徒の状況把握に努めた。学習記録をつけることで生徒の状況を理解することができた。
		学習のつまづきを早期に発見するために学期に1回以上面談を実施する。	B		
		家庭連絡を密にし、家庭での様子を把握し、生徒の置かれている状況を理解した上で指導を行う。	B		
礼儀、人を思いやる心を大切に作る集団作り	礼儀を身につけるため、また、思いやりの気持ちを表す手段としての挨拶を励行する。	B	A	球技大会や遠足の計画、運営等で生徒の主体性を育成した。今後は社会の一員としてのマナーも身につけていこう指導したい。	
	多くの行事や様々な活動において企画から実行まで自ら考え行動する機会を設定する。	B			
第3学年部	最高学年としての自覚を持ち、自立的に行動できる、人間性豊かな生徒を育てる。	社会で必要な規範・マナーが身につくように、担任が率先して挨拶を行うとともに、他者を思いやる大切さを説く。	B	A	各部署の協力を得て指導した結果、日常生活での行動や学校行事での成果において最高学年らしさが発揮された。特に保護者から本校に入学したことに対して高い満足度を得ることができた。
		学校行事等において他者と協力することにより、自己を高めさせ、自分の行動と判断に自信が持てるようにする。	A		
	主体的に学習に取り組む力を高め、学力の向上を図る。	すべての教科を大事にし授業第一の姿勢を貫かせるため、学年部、進路指導部、教科担当で連携した指導を行う。	B	B	進路指導部、教科担当と連携して最後まで指導した。チームガリレオにより主体的に学習に取り組む上位層が形成され、必要な個別指導等により一定の成果があった。受験直前に週末の自習室を確保した。
		定期試験・模擬試験の結果を学年部と教科担当者で共有し、今何をすべきかが生徒にわかるようにし、一人一人が主体的に課題解決に向かうことをサポートする。	B		
	一人一人の希望進路の実現を図る。	面談を各学期に1回行い、個に応じた指導により希望進路の実現に向けサポートする。	A	B	生徒に伝える内容について部内で検討と共有を図り、希望進路実現に向けて面談等できめ細かく指導した。生徒アンケートで一定の評価となっている。一方で受験科目をしぼったり3学期の授業を欠席するなど、集団形成として課題が残った。
		学年集会やHRで望ましい受験に向かう集団のあり方を説き、第一志望を目指して最後まで取り組む生徒集団を目指す。	B		
サイエンスリサーチ科	サイエンスⅡ・サイエンス研究の探究活動を、全校体制で取り組む。	教科主任を中心に各教科との連携を密にとり、全校体制で取り組む。	B	B	初めて一般に公開しての研究発表会を実施し、集大成として研究紀要を作成した。また、今年度、2年生と1年生の合同での活動を実施し、主体的な探究活動に向けての大きな活動の流れを作ることができた。
		大学や関西文化学術研究都市の研究施設・機構等との連携を図り、より深い取り組み内容とする。	B		
		探究活動の成果を研究会や学会等の外部の場で発表させ、研究紀要としてまとめる。	B		
	「スーパーグローバルハイスクールアソシエイト校」として、サイエンス英語に触れる機会を持つ。	国際的に発表されている学術論文に触れる機会を持ち、研究紀要の要旨を英語で書く。	B	B	今年度、1年生を中心に学術論文に触れる機会を持ち、サイエンス英語の学習に取り組んだ。3年生では要旨を英文で書いた。
海外の高校生・大学生と英語を利用して科学研究等の交流を行う。		B			

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		総合評価時:改善策(成果と課題)	
			総合評価			
			各項目	総合		
国語科	個に応じた指導を進め、3年間を通して国語力の育成・伸長を図る。	初期指導においてダブルアップセミナーを行い、高校生としての予習や復習の方法を全体に具体的に指導することによって、自主的な家庭学習へ導く。	B	B	おおむね達成できているが、授業内容の補充、あるいはより高度な内容を求める生徒に対し、それぞれ個別に対応していく。他教科とのバランスを見ながら課題を設定する必要がある。	
		学年・学科・個の実態の把握に努め、それに応じた小テストや宿題、休業中の課題を工夫する。	B			
	授業法や教材についての研修・交流を密にして、難関大学進学指導も視野に入れ教科全体の指導力の向上を図る。	3年間を見通した年間計画を練って課題意識を教員間で共有し、教材や指導法など連携を密にして一貫性のある指導を行う。	B	B	単元・教材・課題ごとに、何に重点を置いて指導するのかを都度共有する。入試問題の研究会については、次年度は当初に開催日時を決めて実施する。学年間でも連携を密にする。	
		難関校を中心に入試問題研究会を開き、指導に生かす方法を研究する。	B			
	読書習慣を定着させ、自ら考える力を育成すると同時に、自己の考えを表現する力を育成する。	授業を通じて、作者や内容に関連した書籍を紹介する。	B	B	授業の中での図書館利用が課題。図書館オリエンテーションに加え、授業でも図書室や資料の活用についての取組をする。ビブリオバトルの試みを授業に取り入れる。	
		感想文やスピーチなど自分の考えを表現させる機会を設け、考え、表現する態度を養うべく言語活動の充実を図る。	B			
		授業や休業中の課題を通じて読書及び図書館利用を啓発する。	B			
	地歴・公民科	アクティブ・ラーニングの実施等、新入試を見据えた学習指導を充実させる。	第2学年設置のA科目において、主任と担当者が連携し、アクティブ・ラーニングを計画・実行し、生徒が主体的に学ぶ姿勢を養成するとともに、内容理解の深化を図る。また、教科会議等を活用し、実施上の課題点や評価方法について共有し、実践の成果をまとめる。	A	A	アクティブ・ラーニングの授業形態は教科内で定着しつつある。今後は具体的手法と効果の研究を更に行い、「主体的・対話的で深い学び」のよりよい実践に繋げていきたい。また新入試に向けた授業内容の構築も更に議論していきたい。
			A科目以外の科目におけるアクティブ・ラーニングの実践方法について教科会議等を活用して検討し、今後の指導に繋げる。	A		
幅広いニーズに応じた、多様な受験に対応できる学習指導を展開する。		教科会議等を活用し、教材や定期試験問題の研究や共有を行うことで、本校の地理歴史科・公民科としての進学対策の方策を確立する。	B	B	教科会で各教員の授業手法等の共有ができた。また、センター対策、国公立2次試験の対策と振り返りを共有し、次年度に向けて改善の方策を練ることができた。中高一貫の教育課程は実施する中で更に検証していく必要がある。	
		教科会議等を活用し、年度の前半に複数回小論文対策、2次試験対策の方法について検討する機会を設け、年度後半の実際の指導に繋げる。	B			
中高6年間を見通した教育内容について研究する。		中学校社会科の各分野の内容を整理・把握し、新学習指導要領の動向にも留意しつつ、地理歴史科・公民科の学習内容との整理・統合を図る。	B			

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		総合評価時:改善策(成果と課題)
			総合評価		
			各項	総合	
数学科	個々の数学力を高める授業の充実	個に応じた適切な学習指導を行うことで、基礎的な数学力を定着させるとともに、知的好奇心をくすぐるなど、個々の数学力がより向上するような高度で格調高い授業を展開する。	B	B	3年間を見据えた進捗で計画を立て、授業が展開できた。統一課題と個々の生徒の様子に応じた課題や補習等を行うことができた。
		計算力及び論理的思考力、記述力を培う授業を行う。	B		
	数学を楽しみ探究する精神の育成	個々の生徒の数学力が向上するような自作問題及び主体的に授業に参加できる教材の開発を行う。	B	A	京都・大阪数学コンテストや数学検定へ多数参加した。コンテストでの入賞者は輩出できなかった。数学通信「GALOIS(ガロア)」を発行し、生徒の興味・関心を高めた。
		生徒が京都・大阪数学コンテストを始めとするコンテスト及び数学検定などへ積極的に参加し、入賞者及び検定合格者が増加するような学習指導や仕掛けを行う。	A		
		数学の魅力や面白さが伝わるような数学通信「GALOIS(ガロア)」を学期に2回以上発行し、HP等で地域にも発信する。	A		
	個々及び組織的な教科指導力の向上	3年間を見通した授業の進捗及び指導方法について、同じコースを担当する教員が交流する場を週1回以上設定し、情報を共有する。	A	B	担当者間で授業の進捗や教授法について十分に打ち合わせできた。個々の教員で入試問題の分析はできた。更なる授業力向上に向けて、今後は多くの入試研究会等に参加できる体制を整えていきたい。中高一貫の6年間に向けて、指導方法などの工夫について組織的により一層検討していく。
		個々の教員が難関大学を中心とした大学別及び分野別の入試問題研究を行い、その成果を教科で共有する場を年3回程度設定し、日々の授業や難関大対策(ガリレオ)等に活用する。	B		
		中高一貫教育を見据え、数学における6年間を見通した教育課程及び組織的な指導体制について検討する。	B		
	理科	主体的な学習を促し、学力の向上を図る。	基礎学力から難関大学入試に対応できる学力までそれぞれの個に応じた学習指導を行い、進路実現に必要な学力を習得させる。	B	B
実験・実習や協働学習を通じて、主体的に学ぼうとする姿勢を身につけさせる。			A		
組織的な教科指導の体制を確立する。		科目主担当を中心に、学年間や同学年での教員間の連携を密にとる。また、模擬試験等の結果を分析し、教科会議において課題を共有し、進学指導に生かす。	A	B	各科目の成績や模擬試験の現状把握を行い、教科担当者間で足並みをそろえて指導した。今後は、分析結果を踏まえた、課題解決のための取組をさらに進めていくことが必要である。
		中高一貫教育を見据えた中高6年間の教育課程の在り方を検討する。	B		
生徒の主体的な探究活動を実施する。		実験・実習を通して科学的なものの見方・考え方を養い、自然を探究する手法を身につけさせる。	B	B	サイエンスⅡの活動を中軸にして、普通科においても探究型の活動に触れられるような工夫が必要である。また、通常授業での実験においても効果的に実施していく。
		学年や分掌と連携し、サイエンスリサーチ科における取組の充実を図るとともに情報発信を行う。	A		
	探究活動やコンテスト等への参加を通して、課題解決に主体的に取り組む姿勢を身につけさせる。	B			

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		総合評価時:改善策(成果と課題)
			総合評価		
			各項	総合	
保健体育科	自己の体力の課題を見つけ、体力向上を図る能力を育成する。	自己の体力等の状況を知り、さらなる体力向上を図るよう取り組ませる。	B	B	自己の体力の現状を正しく理解させ、運動への取り組み方を考えさせたい。また自他の安全についてさらに配慮できるよう指導をしていく。
		運動に関わる原則、事故防止等を理解させた上で安全かつ合理的な運動を実践させる。	B		
	健康、安全に行動をとることが出来る意識を育成する。	薬物乱用についての正しい知識を身につけ、適切な行動をとることができる態度を養う。	B	B	保健の授業のみならずあらゆる生活の場面でも自他の健康について考える力を育成していく。
		現代社会において問題となっている事象について精査し、将来の生活につなげる力を養う。	B		
芸術科	一般教養としての芸術の基礎・基本を把握させ、芸術を追究する態度を育てる。	中学校との関連をふまえ、表現や鑑賞の基礎・基本的事項をしっかりと把握させる。	B	B	芸術の諸要素を感受し自己の表現を追究する姿勢を醸成する事ができた。
		鑑賞や制作・発表を通して、幅広い芸術の表現方法について理解を深め、芸術を追究する態度を育てる。	B		
		表現や鑑賞の学習を通して、多様な芸術についての見方・考え方・とらえ方(思考力・判断力・表現力)を学び、芸術を愛好する心情を育てる。	B		
	基本的な表現技法、演奏技能を育てる。	基礎・基本的内容の整理と多様な表現について研究し、技能を育てる方法について研究を深める。	B	B	基本的な表現技法、演奏技能を育てる事ができた。個々に応じた適切な指導を行うことができた。
		日本の伝統的な芸術と西洋の伝統的な芸術の類似点や相違点を感受し、自ら表現することができる力を養う。	B		
		言語活動の拡充を図り、自らの言葉で諸芸術を批評できる心情を育てる。	B		
	よりよい授業に向けて教材開発・研究を行う。	研究授業や互見授業週間、研修会等を通して、教授方法などを研究し、授業改善に努める。	B	B	適切な教材・教具を活用し、横断的な授業を展開することができた。様々な研修を受け自己研鑽に努めた。
		多角的視野に立脚したアプローチで学習者の知的好奇心に迫る授業に努める。	B		
		多様な芸術について理解を深めさせるための鑑賞教材を研究し、その充実に努める。	B		

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		総合評価時:改善策(成果と課題)		
			総合評価				
			各項	総合			
英語科	基礎学力を定着させ、希望進路の実現に向けて生徒に学力の伸長を実感させる。	学習の仕方を具体的かつ継続的に指導し、個々の目標を明確に持たせ、適切な課題や小テストを与えながら、授業や家庭学習に取り組みさせる。	A	B	生徒の自主性や計画性を育てていく方向を探りつつ、小テストや課題提出を行った。各科目の担当者間の連携をより密にし、教材や指導法、学力把握等の共有を一層進める必要がある。		
		同科目の担当者間の連携を密にし、どのクラス・講座においても教材や指導目標等をそろえて、学年全体のレベル(模試の平均点偏差値等)をアップさせる。	B				
		生徒個々のレベルに応じた指導をより効果的にするために、授業内容を柔軟に見直しつつ、土曜学習や補習授業を習熟度別講座編成等で活用する。	B				
	英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。	授業に「読む」「聴く」「書く」「話す」の四技能を取り入れ、生徒が英語を使う量を増やし、コミュニケーションに対する関心や意欲を育てる。	B	B		特に「書く」「話す」活動を取り入れ、チーム・ティーチング以外でも生徒が英語を使う量は着実に増えてきている。大学入学新テストに向けて、四技能(五領域)をバランスよく取り入れた授業研究をさらに進め、共有していかなければならない。	
		留学や海外の高校生との交流等、英語によるコミュニケーションを実践する機会を積極的に活用するよう指導する。	B				
		授業で扱った内容に対して「自分はどう思うのか」を常に意識させ、自分の考えを英語で話したり、書いたりする機会を確保する。	B				
家庭科	将来を想像し創造していく自立した家庭経営者の育成を目指す	実践的・体験的な学習を通して、知識と技術の定着を行う。	A	B	対話的で深い学びを、効果的に学習指導に取り入れるよう工夫し、実践に努めた。		
		アクティブラーニングを充実させ、客観的思考や他者理解に努めさせる。	B				
	論理的、実践的、自発的な生徒の学びを育成する	家庭との協力による復習の機会や年間を通した継続的な取り組みを生徒発信により充実させる。	B	B			実践的・体験的な活動を重視し、特に環境的学習については継続的に家庭での定着を図った。
		生活力を高める授業の充実と生徒の主体的活動の充実に努める。	B				
	教科指導力の向上	中高一貫教育を見据え、6年間を見通した指導について検討する。	B	B		中高一貫教育についての情報収集と研修を行うことで、次年度への見通しを立てることができた。	
		互見週間を利用して他教科の指導法から学ぶとともに、客観的な視点を大切にする。	B				
情報科	情報について科学的な見方や考え方を養い、活用できる知識や技術を身に修得させる。	情報の科学的理解と、情報の収集、分析、活用、発信等の実習を通して、問題の発見とその解決の方法を習得する。	B	B	情報の科学的な理解等については、知識として身につけさせることができた。また、リテラシーに関しては、現在及び将来必要となるレベルのものを習得させることができた。		
		将来、必要と予想されるコンピュータリテラシーを習得させる。また、プレゼンテーション実習等を通じてコミュニケーション能力を養う。	B				
	情報倫理を身につけ、情報社会に積極的かつ公正に参画する態度を育てる。	インターネット、電子メールや携帯電話などの利便性と信憑性・危険性を理解、把握させる。	B	B			様々な機会を利用して、インターネット利用の利便性、信憑性、危険性を理解させることができた。
		著作権保護の重要性を理解させる。	B				
	教員の指導力の向上	情報に関する最先端の内容の研究と指導法の研修を継続的に行う。	B	B		研修を実践することができた。	

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

<p>学校関係者 評価委員会 による評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自己評価の内容はおおむね妥当である。 ・生徒の主体的活動を促すさまざまな活動を進めることができている。実施された内容を外部へ発信していくことで、南陽の魅力がより伝わっていくと考えられる。 ・今年度は、特に中学校開校に向けた準備を進めた1年であった。生徒募集の状況から見て、附属中学の教育内容についての理解は一定得られただろう。次年度以降、施設設備のさらなる整備、近隣中学校との連携等の充実を図っていく必要がある。 ・生徒の内面に深くかかわる、いじめの早期発見等の取り組みや人権教育等については、よりいっそうの充実が望まれる。 ・ダイバーシティとワークライフバランスに係る取り組みについては、教職員の負担実態の把握を行いながら進めていく必要がある。
----------------------------------	--

<p>次年度に向けた改善の方向性</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・高大接続改革や新学習指導要領への適応をすすめるとともに、附属中学校第1期生を迎えて中高一貫校の利点や地の利を活かした組織的な学校運営体制を構築する。 ・学校が生徒にとって安心・安全な場所でありつづけるために、いじめの早期発見や人権教育等についての取り組みを充実させる。 ・働き方改革のもとで学校業務や部活動の適正化を推進し、ワークライフバランスに係る取り組みを具体化させる。 ・ホームページによる情報発信や、学校行事等の外部への公開をさらに進めていく。 ・本校生の留学支援と、海外からの留学生との交流を充実させ、将来グローバルリーダーとして活躍する生徒の育成に取り組む。 ・サイエンスリサーチ科で体系化して取り組んできた探究型課題研究(サイエンスⅠ・Ⅱ・研究)のゼミ活動を更に深化させるとともに、その成果を普通科の取組みへと拡大をめざす。
----------------------	---